

● 認知症による記憶障害

- 例
- ・食事したことを忘れる
 - ・同じことを何度も尋ねる
 - ・どこかにしまった財布が見つからない

覚えられない、思い出せないのは…
目や耳から入る情報の脳への
定着が難しいため

「体験していない」
が本人の実感



- ✕
- ・失敗を厳しく注意する
 - ・無理に覚えさせようとする

不安や混乱が、
暴言・暴力に
つながる場合も



-
- ・本人の状況を理解した対応
 - ・得意なことをお願いする

安心できたり、
喜ばれたり
する生活



記憶障害 本人の尊厳配慮

認知症の症状の一つに、「記憶障害」があります。さっき食事をしたのに「まだ食べていない」と言うとか、知人と会って話したことを覚えていない、といったケースがみられます。

記憶の仕組みは、①目や耳から入る出来事の情報認識②その内容が脳に定着する③必要に応じて思い起こす——という流れです。

認知症診療を専門とする和光病院（埼玉県和光市）の今井幸充院長は、この②の「定着」が難しくなるケースが多いと説明します。

よく比較される「加齢に伴う物忘れ」では、何を食べたかや会った人の名前を思い出せないなど、体験の一部を忘れます。これに對

し、認知症の記憶障害では、「食事をしたことなど、出来事や体験そのものが抜け落ち、本人にとっては体験していないのと同じ状態」（今井院長）といます。

家族が「ご飯は食べたでしょ」と事実を伝えても、かえって混乱を招くでしょう。財布をどこかにしまったことを忘れ、「なくした」と言うのも仕方ありません。「身に覚えのないことで責めては、尊厳を傷つけられたと感じてしまう」と今井院長は心配します。

● 不安が暴言・暴力に

家族はつい、忘れたことを覚えさせようとしていたり、失敗を厳しく

注意したりしがちです。でも、それが本人の不安を大きくし、周囲に対する悪い感情が残ることにつながって、「BPSD（行動・心理症状）」が生じる場合もあります。

暴言・暴力といった形で家族に怒りをぶついたり、大事な物を誰かにとられたなどと思い込んだりと様々なケースがあります。

今井院長は「直前の出来事を忘れてしまうのはよくあることと理解し、本人に寄り添うことで、状況が変わることもある」と説明します。「食事はまだ？」という訴えに、「もう食べたでしょ」と言い返すのではなく、「用意するから待ってね」とお茶を出す。そうしたやりとりで本人が安心して

ば、BPSDの予防や改善にもつながるといいます。

● 「残された力」発揮

記憶障害があっても、若い頃に身につけた技術や知識は失われない場合があります。和光病院では、認知症の高齢者が三味線を上手に弾いて、医師らを驚かせた事例があるそうです。

「人それぞれ、裁縫や園芸など得意なことがある。家族の役に立って喜ばれたりすれば、心の安定にもつながる」。今井院長は「残された力」を発揮できるように周囲がサポートすることの大切さを強調します。

今回の「認知症ポジティブ部」は、6月14日に掲載予定です。高齢期の生活や認知症についての思い・疑問をお寄せください。メールansin@yomiuri.com、ファクス03・3217・9957。